

# 多重対応分析を用いた子育て意識空間の構築 ——教育期待の多元性に着目して——

金南 咲季\*・数実 浩佑\*\*

Constructing Space of Parental Values toward Child-Rearing with Multiple Correspondence Analysis: A Focus on the Multiplicity of Parents' Educational Aspirations

Saki KINNAN・Kosuke KAZUMI

## 1. 問題の所在

本稿の目的は、大都市に居住する30代の父親・母親に対するオンラインパネル調査<sup>1)</sup>から得たデータをもとに、狭義/広義の子どもへの教育期待に焦点を当てて多重対応分析を行い、その全体像、およびその背後にある個人の特徴との対応関係を明らかにすることである。

これまで親の教育期待は、教育投資や子どもとの接し方に影響を与え、子ども自身の意欲や成績、延いては最終的な教育・地位達成にも重要な影響を及ぼすことが明らかにされてきた(Sewell, Haller, and Portes 1969; 荒牧 2016)。ゆえに、親の教育期待の実態を明らかにすることは、家庭環境が子どもの学力や進学行動に影響を与えるメカニズムの一端を明らかにするという意味で、学力格差の再生産や、その縮小に向けた方途を検討するうえできわめて重要な意義をもつ。

こうした親の教育期待に関しては、これまで社会経済的地位(職業や収入、学歴などを統合した地位)との関連からの検討が盛んに行われ、両者に強い結びつきがあることが明らかにされてきた(中澤 2009; 藤原 2009; 鷹島 2020a; 2020b; 須永 2021 など)。しかしこれらの知見は、大まかな見取り図を示す一方、「大卒以上」や「専門卒以上」と一括りにされる期待のなかに、いかなる質的な差異がみられるのかという問いには切り込むことができていない。また、この点とあわせてこれまでの議論は多くの場合、高校や大学進学といった狭義の進学期待に限定され、「将来どのような子どもになってほしいか」というより広義の期待については十分に検討されていない。荒牧(2023: 6)は、親が子どもに望む「幸福」のかたちは様々あるにもかかわらず、これまでの研究においては、その点を明確に論じないまま、高い学歴や社会経済的地位という「個人主義的な成功」の重要性を暗黙裡に前提としてきたことを課題として指摘している<sup>2)</sup>。

こうした課題に対して金南(2019)は、狭義の教育期待、すなわち社会経済的地位の追求という側面からだけでは捉えきれない、子どもに対する期待のバリエーションを、約3年半にわたる家庭をフィールドとした参与観察をもとに描き出している。具体的には、経済資本、文化資本、社会関係資本の3つの資本のうち、いかなる資源を子育てに最も活用しているかという

\* 人間関係学科 講師

\*\*宝塚大学 東京メディア芸術学部

点に着目して分類した子育ての類型に沿って、それぞれの教育期待の特徴をまとめている。ここでは3つの資本全てを活用しながら子育てを行う「全資本活用型」は、大卒以上を自然な選択肢と捉え、現在の労働市場や、国際化、情報技術の高度化などの今後の社会的動向を視野に入れながら一步上を見据えた期待を、「文化資本活用型」は全資本活用型のような一步上の卓越性を目指させるというよりも、子どもの興味関心を様々な機会を与えて掘り起こしながら最大限サポートしていくことで「個性」を伸ばすことに強調点を置いた期待を、「経済資本活用型」は、高い教育達成に価値を置き、そこに結びついていくような働きかけを一定程度行いつつも、必ずしも学歴獲得に強いこだわりがあるわけではなく、それよりは自分の力で着実に生きていくといった「自立」を求める志向性を、「社会関係資本活用型」は、子どもたちに必ずしも高い進学期待をかけているわけではなく、背伸びをしすぎず自然体でのびやかに、安定した生活を過ごしていくことを第一に望んでおり、大卒以上を希望している場合も、「分からなさ」を抱えた上での暫定的な期待を形成している様子が描き出されている。

以上は、活用する資本の違いによって狭義／広義の教育期待には差異がみられ、その独自の価値観や志向性を土台に、諸資源を活用しながら日常の子育て実践を組み立てていることを、長期にわたる詳細なフィールド調査に基づいて明らかにしたという点で重要な意義をもつ。しかしあくまで、母親の期待に焦点を当てたものであることや、13家庭という限られた対象から導き出された知見であるという点に限界が指摘できる。また、これらの差異がみられる背景には、各家庭が保有する資本の総量の違いも影響している——全資本活用型は父母ともに高学歴・高収入の家庭であることや、社会関係資本を活用する家庭はすべて非大卒家庭であることなど——と考えられるが、あくまで類型ごとの期待の特徴を記述するにとどまり、こうした社会的属性との関連が十分に分析されているわけではない。

なお、この点に関して、学齢期の子どもをもつ女性を対象に、子育て志向とネットワークや階層的指標との関連について計量分析を行った荒牧（2023）では、子どもに高い地位達成を志向し成績不安を抱えたり塾通いをさせたりする競争重視の子育て態度には、家庭の経済状況の豊かさが一定の関連を持つという結果がみられる一方で、人の役に立つ仕事をして世の中に貢献したり、進んで人を助けられる人になってほしいといった共生重視の子育て志向には、階層要因は全く関連していないという知見も見出されており、子どもへの期待の中身によって、階層的要因が等しく影響を及ぼすわけではないことが示唆されている。今後は、こうした教育期待と社会的属性との複雑な結びつきについても丁寧に分析をする必要があると言える。

以上の知見と課題をふまえれば今後、対象を拡大させるとともに、広義の教育期待のバリエーションを射程に入れつつ、社会的属性や保有する資本との関連も分析に組み込んだ量的研究へと展開させていくことで、今日の多様化する教育期待の特徴を明らかにし、子育てと格差の生成メカニズムをより詳細に捉えていくことが必要であると言える。

## 2. 先行研究

子どもへの教育期待を分析する方法としてまず思いつくのは、回帰分析によるアプローチである。すなわち、子どもへの教育期待を従属変数、保護者の性別や社会経済的地位を独立変数としたうえで、どのような要因が教育期待に影響を与えるのかを検討するというアプローチである。実際にこれまで、多くの先行研究においてこうしたアプローチが採用され、格差生成メカニズムの一端が精緻な分析によって明らかにされてきた（中澤 2009; 藤原 2009; 鳶島 2020a;

2020b; 須永 2021 など)。しかしながら、こうした研究が前提としてきた、教育期待を「進学期待」と読み替えて一元的に捉え、その期待の多寡を問うという枠組みだけでは不十分であると言えるだろう。教育期待を多元的に捉え、いかなる期待を有しているかといった問いに迫っていくこともまた、子育てのリアリティを明らかにする上では不可欠だと言えるからである。また知念(2022a)は、研究者が変数の独立性を前提に従属変数を確定し、その規定要因を分析する回帰分析の「線的思考」では、諸変数間の関係を十分に捉えることができないと指摘する<sup>3)</sup>。本稿の関心にひきつけられれば、たとえば「子どもには最低、大学以上は卒業してほしい」という考えは、「高い学歴を得て競争社会を勝ち抜き、高収入の仕事を得てほしい」という願望と結びついている場合もあれば、そうした考えとは距離をとりつつ「大学で見聞を広め、困っている人を助けたり、社会的課題の解決に貢献したりできる人になってほしい」という願望と結びついている可能性もあり、狭義の進学期待以外の変数とも関連しながら形づくられていると考えられる。このように、複数の変数を同時に考慮に入れて相互に絡み合う関係を捉えながら教育期待を構成する論理に迫っていくこともまた重要な課題だと言えるだろう。

以上をふまえて本稿では、教育期待を多元的に捉えるとともに、多数の変数を同時に考慮に入れて相互の関連を読み解く上で強みを発揮する多重対応分析(以下、MCA)を分析方法に採用する。MCAは、カテゴリー変数間の関係を調べるための記述的且つ探索的な統計分析の手法であり、ブルデューの著『ディスタンクシオン』において、人々の趣味嗜好と出身階級の関連を、その多元性をふまえた上で分析する際に使用された手法としてよく知られている。具体的には、様々な趣味・嗜好に関する変数を用いて構築された生活様式空間(the space of lifestyles)と、人口学的変数から構築される社会空間(social space)との間の対応関係を探るなかで、資本の総量の多寡という量的な次元の軸と、保有する資本の種類構成(経済資本と文化資本のバランス)という質的な次元の軸からなる空間上に諸個人がどのように配置されるのかをMCAを用いて明らかにしている。

MCAを用いた国内の先行研究としては、大学進学ジェンダー差を分析した知念(2022a)や高松(2022)、教育費の公私負担意識を分析した近藤(2019)、小学生の生活様式空間を分析した知念(2022b)、子育てとパーソナルネットワークの関係を分析した荒牧(2023)、日本の文化資本の機能を階層とジェンダーの視点から分析した片岡(2019)などがあげられる。いずれも、「○○という特徴をもつ人ほど、△△という傾向がある」という線形的な関係を想定したうえで分析をするのではなく、進学意識、政治意識、学校・生徒指導・業績主義への親和性、パーソナルネットワーク、文化資本といった変数の多元性に着目したうえで、その背景にある力学を分析するというアプローチに共通点がみられる<sup>4)</sup>。

なかでも、本稿の関心および分析手法の観点から重要な先行研究として位置づけられるのは、多様化する子育て実践の相互の関連と、その背後に存在するさまざまな社会経済的要因を視野に入れて、子育て格差の全体像の描写を試みている川口(2020)である。具体的には、西日本の地方都市に位置する自治体の小学校6年生の保護者4,259名を対象とした質問紙調査から得たデータをもとに、ブルデューの社会空間アプローチを念頭に、MCAを用いて子育てに関する生活様式空間を構築した後、諸個人の社会的属性を補助変数として挿入し、空間上の位置との対応関係を探っている。その結果、子育て空間の特徴を縮約する2軸として「子育て活動の総合的な活発さ」と「学校・地域志向」が見出され(軸の分散に占める割合はそれぞれ74.9%, 14.2%), 前者は学歴・年収が高いほど、および専業主婦家庭において活発であること、後者は、両親が海外生まれ・母常勤・母親以外の回答者といった学校・地域活動に参加しづら

い人々において低いことが明らかにされている。その上でこれらの知見をふまえて、これまで先行研究において子育て格差は、主に学歴や年収等の資源の多寡によって論じられてきたが、それに加えて、より緩やかな対立軸とはなるものの、学校や地域への参画の度合いという別の対立軸が存在する可能性が示唆されたことと結論づけている。

以上の川口の研究からは、社会空間アプローチを利用した MCA によって、複雑化する子育てと格差の関連についての総体的な把握、および経済・教育資源の多寡という一元的な尺度では十分に捉えきれない子育て格差の分断線に肉薄できる可能性が示されている。本稿では、この川口の問題意識および分析方法を引き継ぎつつ、保護者の学校や地域の行事等への参加の程度といった具体的な「子育て活動」に代えて、「子育て意識」、特に子どもへの教育期待に焦点を絞る。具体的には、子どもに対する教育期待を狭義の進学期待だけでなく、より広義に捉えることを意図した質問項目をもとに、教育期待に関する生活様式空間(以下、「子育て意識空間」)を描き出し、その特徴およびその背後にある社会的属性や保有する資本との対応関係を分析していくことにしたい。

本稿では上述の関心を、30代の既婚男女を対象に検討していく。30代は結婚、妊娠、出産といったライフイベントが生じやすく、子育て初期と重なることが相対的に多い世代である。妊娠・出産期や子どもの乳幼児期は、女性の就業や夫婦関係、その後の子育てのあり方に決定的な影響を及ぼす重要な時期とされているが、この時期に焦点を当てた社会学的研究は依然限定的である。また、ペアレントクラシーが高まりをみせ (Brown 1995=2005; 志水 2022)、近年では教育格差は幼稚園入学以前から生じていることも明らかになってきているが (Heckman 2013=2015 など)、そのメカニズムは十分に明らかにされていない。以上をふまえれば、家族形成や家庭教育の土台を構築していく入口の時期にある世代に焦点を当てて具体的な意識を探っていくことは、教育格差の生成メカニズムを捉えていく上でも重要な意義をもつと考えられる。

### 3. 調査概要と分析方法

#### 3.1. データの概要

本稿で使用するデータは、オンラインパネル調査、すなわち調査会社の保有するオンラインパネルからウェブ法を用いて回答を収集する調査から得た。具体的には、調査会社の国内大手である株式会社マクロミルが提供する「Questant」を利用した。これは、調査者自身がインターネット上のセルフ型アンケートツールを利用して調査票を作成した上で、約 2,394 万人<sup>5)</sup>の回答者を保有する GMO リサーチ株式会社の「Japan Cloud Panel」と提携したサービスを利用して対象者を募り、Web 上でアンケートを実施できるサービスである。本研究ではこれを通じて三大都市圏である東京都、愛知県、大阪府に居住する 30 代の男性 336 名、女性 331 名の計 667 名を対象に、2023 年 11 月 15 日 (1 日間) にデータを収集した。このうち本稿では分析の対象を、初婚による配偶者と子どもをもつ男性 (父親) 68 名と女性 (母親) 110 名の計 178 名とした。

こうしたオンラインパネル調査はその有用性だけでなく問題点も指摘されている (轟ほか編 2021)。特に留意すべき点として挙げられるのは、調査対象者が、インターネット調査会社のオンラインパネルに登録し、謝礼等の支払いを対価に自発的に調査に協力する意思をもつ人々であることから無作為抽出とはなり得ず、よって結果を母集団の縮図とみなすことはできないという点である。実際に、他の調査方式に比べて対象者に占める高学歴の割合が多くなる傾向

等が指摘されているが（本多 2005），今回の調査においても，四年制大学以上を卒業した者が全体で 446 / 667 名（66.9%），今回分析の対象とするケースで 116 / 178 名（65.2%）と，同様の偏りがみられている<sup>6)</sup>。本稿の関心は，母集団を想定しその教育期待の特徴を推定することではなく，あくまで対象者の特徴を記述することにあるものの，こうした調査方式の限界を自覚した上で分析を行うものとする。

調査票の構成および質問項目の概要は表 1 のとおりであるが，今回の分析において使用するものは，子どもへの教育期待に関わる変数と本人の学歴，職業，収入，社会関係，文化的活動に関わる変数に限定している（詳細は表 2, 3 を参照）。

表 1 質問項目の概要

問1-8 配偶者・子どもの有無、職業、最終学歴、（配偶者有の場合）配偶者の学歴、（配偶者無の場合）結婚相手に求める最低限の学歴
問9 性別役割分業意識、家事育児の外部化に対する考え
問10-12 子どもへの教育期待
問13 （配偶者有の場合）家事・育児分担の割合と負担感
問14-17 社会関係、文化的活動、個人年収、（配偶者有の場合）配偶者の年収
問18-19 （配偶者有の場合）仕事・家事・育児の両立や分担、夫婦関係での困りごと・悩み（自由記述）／（配偶者無の場合）仕事・家庭・個人の活動などの生活全般に関することでの困りごと・悩み（自由記述）

### 3.2. 分析方法と使用する変数

川口（2020）によると，社会空間アプローチでは，MCA をどのように利用するかについて，①社会空間を構築し，そこに生活様式に関わる変数を補助変数（supplementary variables）として事後的に挿入するパターン，②生活様式空間を作成し，社会的属性を補助変数として挿入するパターン，③生活様式空間と社会空間を別々に構築し，その相同性を検討するパターンという主に 3 つの手順があるという。保護者の子育て活動の分析を主眼とする川口（2020）に倣って保護者の子育て意識の分析を目的とする本稿も，②のアプローチを採用する。

分析に使用する変数は表 2 のとおりである。まず，子育て意識空間を構築する変数として，次の 3 種類の変数を採用する。第 1 に，子どもに「少なくともどの学校段階まで教育を受けてほしいか」という狭義の教育期待（進学期待）を用いる。第 2 に，Lareau（2011）がアメリカで長期にわたる家庭・学校等での参与観察をもとに見出したミドルクラスの「全面発達に向けた計画的子育て（concerted cultivation）」とワーキングクラスの「自然な成長に任せる子育て」（accomplishment of natural growth）という子育てスタイルとの対応を想定して設定した「A：親が積極的に子どもの発達を促し，計画的に子育てをしたい」と「B：親が積極的に子どもの発達を促すというよりも，子どもの自主性に任せて，自然な成長を見守る子育てをしたい」のうち，いずれに近い考えをもっているかを 4 件法で尋ねた子育て方針に関する項目を用いる。第 3 に，子どもの将来に関する意識を尋ねた項目を用いる。具体的には，「手に職をつけてほしい」「社会的課題の解決に貢献できる人になってほしい」「地元で就職してほしい」など，これまで必ずしも十分に捉えられてきたとは言い難い広義の教育期待を尋ねた 16 項目を用いる。

以上の計 18 項目を子育て意識空間を構築するための変数として使用する。また、これら 18 項目における選択肢として計 39 カテゴリーを使用する。なお表 2 では、各軸に対して平均以上の寄与 (>100/39=2.56) がみられる場合を太字とした。

また、表 3 に示したように補助変数は、回答者の性別、社会経済的地位（本人の学歴、年収、職業の雇用形態、以下これらをまとめて SES とする）、社会関係、文化的活動を使用する<sup>7)</sup>。これらの補助変数を、上述の変数を用いて構築した子育て意識空間上に後から配置することによって、教育期待と回答者の属性および保有する資本との対応関係を明らかにすることができる。

表 2 子育て意識空間の構築に用いる変数

変数	質問と選択肢	MCAでの表記	度数 (%)	寄与 (1軸)	寄与 (2軸)
進学期待	あなたは親として、お子さまに少なくともどこまでの学校教育を受けて欲しいとお考えですか。				
	「中学校まで」と「高校まで」を合成	高校	33 (18.5%)	<b>3.19</b>	<b>2.71</b>
	「専門学校・各種学校まで」と「短期大学まで」を合成	専門・短大	22 (12.4%)	0.04	0
	「四年生大学まで」と「大学院まで」を合成	大学・大学院	122 (68.5%)	1.11	0.68
	その他	欠損値	1 (0.6%)	-	-
子育て方針	子育ての方針について、あなたの考えはどちらに近いですか。 A: 親が積極的に子どもの発達を促し、計画的に子育てをしたい B: 親が積極的に子どもの発達を促すというよりも、子どもの自主性に任せて、自然な成長を見守る子育てをしたい				
	Aに近い	子育て A+	16 (9.0%)	0.58	0.60
	どちらかといえばAに近い	子育て A-	55 (30.9%)	0.20	1.86
	どちらかといえばBに近い	子育て B-	84 (47.2%)	0.50	0.71
	Bに近い	子育て B+	23 (12.9%)	0	1.33
子どもの将来への期待 (計16変数)	あなたは、お子様の将来についてどのように考えていますか。 「とてもあてはまる」「まああてはまる」 = 「+」 「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」 = 「-」				
	できるだけ高い学歴を得てほしい	高い学歴 + 高い学歴 -	122 (68.5%) 56 (31.5%)	<b>4.09</b> <b>8.91</b>	0.24 0.52
	手に職をつけてほしい	手に職 + 手に職 -	157 (88.2%) 21 (11.8%)	0.76 <b>5.70</b>	1.13 <b>8.42</b>
	給料が低くても職を失う心配のない安定した仕事についてほしい	安定した仕事 + 安定した仕事 -	113 (63.5%) 65 (36.5%)	0.67 1.16	2.06 <b>3.57</b>
	リスクを顧みず、やりたいことに挑戦してほしい	やりたいこと + やりたいこと -	137 (77.0%) 41 (23.0%)	0.47 1.55	0.12 0.41
	とにかく高収入の仕事についてほしい	高収入の仕事 + 高収入の仕事 -	71 (39.9%) 107 (60.1%)	<b>4.14</b> <b>2.75</b>	<b>3.41</b> 2.26
	人なみの生活がおくれればよい	人並みの生活 + 人並みの生活 -	156 (87.6%) 22 (12.3%)	0.14 1.00	<b>3.09</b> <b>21.93</b>
	現状に満足せず、常に努力し続けられる人になってほしい	努力し続ける + 努力し続ける -	141 (79.2%) 37 (20.8%)	1.85 <b>7.04</b>	0.05 0.17
	自身の独自の個性を伸ばすことを大事にしてほしい	独自の個性 + 独自の個性 -	152 (85.4%) 26 (14.6%)	1.16 <b>6.80</b>	0.95 <b>5.58</b>
	地元で就職してほしい	地元で就職 + 地元で就職 -	70 (39.3%) 108 (60.7%)	0.04 0.03	0.09 0.06
	競争社会を勝ち抜いてほしい	競争社会 + 競争社会 -	109 (61.2%) 69 (38.7%)	<b>3.07</b> <b>4.85</b>	1.01 1.60
	クリエイティブな仕事についてほしい	クリエイティブな仕事 + クリエイティブな仕事 -	75 (42.1%) 103 (57.8%)	<b>5.04</b> <b>3.67</b>	0.41 0.30
	背伸びをせずに、自然体でのびのびと暮らしてほしい	のびのび暮らす + のびのび暮らす -	158 (88.8%) 20 (11.3%)	0.16 1.28	<b>2.73</b> <b>21.59</b>
	自分が少し損をしても困っている人を助けられる人になってほしい	人を助ける + 人を助ける -	122 (68.5%) 56 (31.5%)	0.63 1.38	0.55 1.19
	世間的な評価の高い仕事についてほしい	評価の高い仕事 + 評価の高い仕事 -	94 (52.8%) 84 (47.2%)	<b>4.06</b> <b>4.54</b>	<b>2.86</b> <b>3.20</b>
	社会的課題の解決に貢献できる人になってほしい	社会的課題の解決 + 社会的課題の解決 -	113 (63.5%) 65 (36.5%)	<b>3.18</b> <b>5.53</b>	0 0
	国際的にも活躍できる人になってほしい	国際的に活躍 + 国際的に活躍 -	103 (57.9%) 75 (42.1%)	<b>3.66</b> <b>5.03</b>	1.09 1.50

多重対応分析を用いた子育て意識空間の構築

表3 補助変数

変数	質問と選択肢	MCAでの表記	度数 (%)
性別	男性	男性	68 (38.2%)
	女性	女性	110 (61.8%)
-----			
学歴	あなたが最後に行った（または在学中の）学校は次のどれにあたりますか。 「中学校」「高校」を合成	中学・高校	36 (20.2%)
	「専門学校（高卒後）」「短大」「高専」を合成	専門・短大・高専	26 (14.6%)
	「大学（4年制）」「大学（6年制）」「大学院修士課程」「大学院博士課程」を合成	大学	116 (65.1%)
	現在している仕事は次のどれにあたりますか（産休・育休・休職中含む）。 「経営者・役員」「常時雇用されている一般従業者」「自営業主・自由業者」「自営業の家族従業者」「内職」を合成	経営者・一般職・自営	103 (57.9%)
職業	「臨時雇い・パート・アルバイト」「派遣社員・契約社員・嘱託社員」を合成	パート・派遣	26 (14.6%)
	「無職（仕事を探している）」「無職（仕事を探していない）」を合成	無職	49 (27.5%)
	あなたが個人の前年1年間の収入（税込みの額面）はどれに近いでしょうか（臨時収入、副収入も含めてください）。		
収入	「収入はなかった」「100万円未満」「100～129万円台」を合成	130万円未満	78 (44.1%)
	「130～199万円台」「200～299万円台」を合成	300万円	13 (7.3%)
	「300～399万円台」「400～599万円台」を合成	600万円	50 (28.2%)
	「600～799万円台」「800～999万円台」を合成	1000万円	29 (16.4%)
	「1000～1199万円台」「1200～1399万円台」「1400万円以上」を合成	1000万円以上	7 (3.9%)
	欠損値	欠損値	1 (0.6%)
	あなたは次のような人々とよく交流していると思いますか。 「よく交流している」「ある程度交流している」 = 「+」 「あまり交流していない」「ほとんど・まったく交流していない」 = 「-」		
社会関係	近隣の人々	近隣の人 +/-	67 (37.6%)
	趣味でできた知り合い	趣味の人 +/-	48 (27.0%)
	仕事でできた知り合い	仕事の人 +/-	73 (41.0%)
	インターネット上の知り合い	ネットの人 +/-	35 (19.7%)
	学生時代の友人	学生時代の友人 +/-	92 (51.7%)
	全体的な人間関係（家族・親族は除く）	全体的な人間関係 +/-	115 (53.4%)
	家族・親族との関係全体	家族親族 +/-	151 (84.8%)
-----			
文化的活動	あなたは次の活動について、どのくらいしているかを、最近の5、6年でお答え下さい（あなたが自由時間に行う場合に限りです）。 「よくする」「ときどきする」 = 「+」 「あまりしない」「ほとんどしない」「まったくしない」 = 「-」		
	クラシック音楽を聴く	クラシック +/-	27 (15.2%)
	美術館や博物館に行く	美術館・博物館 +/-	31 (17.4%)
	スポーツをする（散歩・ハイキング等を含む）	スポーツ +/-	65 (36.5%)
	図書館や本屋に行く	図書館・本屋 +/-	64 (36.0%)
	読書をする（雑誌・マンガを除く）	読書 +/-	62 (34.8%)
	趣味や習い事・稽古事をする	趣味・習い事 +/-	40 (22.5%)
	外国語の学習をする	外国語 +/-	26 (14.6%)
	海外旅行に行く	海外旅行 +/-	22 (12.4%)
	ボランティア活動をする	ボランティア +/-	17 (9.6%)

## 4. 子育て意識空間の特徴

本節では分析結果をふまえて、どのような子育て意識空間が構築されるのか、その全体像と特徴について確認していく。

### 4.1. 多重対応分析によって抽出された軸の解釈

まずMCAの結果として抽出された軸について確認していく。ベンゼクリによる修正分散率<sup>8)</sup>を求めたところ、1軸（横軸）が80.9%、2軸（縦軸）が13.9%であった。この2つで全体の94.8%の分散を示しており、1軸と2軸だけで今回構築した子育て意識空間のほとんどを説明していることが分かる。以下では、この1軸と2軸からなる空間を構築し、その空間上に各変数のカテゴリーを配置した図をもとに軸の解釈を行っていく。

次の図1は、1軸に対して平均以上の寄与 (>100/39=2.56, 表2中の太字) をもつカテゴリのみを示した図である。右側に「+」が、左側に「-」が集まっていることから、1軸は子どもに対する「教育期待の多寡(積極性の度合い)」を表しており、右側に向かうほど子どもに積極的に期待をかけていることが読み取れる。なかでも1軸に対して大きな寄与をもっているのが「高い学歴-」(8.91)であり、狭義の進学期待が重要な要素となっていることが分かる。このことは進学期待を「中学もしくは高校まで」とする回答が平均以上の寄与(3.19)をもち、左側に位置していることによっても示されている。また、この「高い学歴-」に次いで大きな寄与をもつのは、「努力し続ける-」(7.04), 「独自の個性-」(6.8), 「手に職-」(5.7), 「社会的課題の解決-」(5.53)となっており、左に向かうほど消極的な教育期待となる傾向が読み取れる。

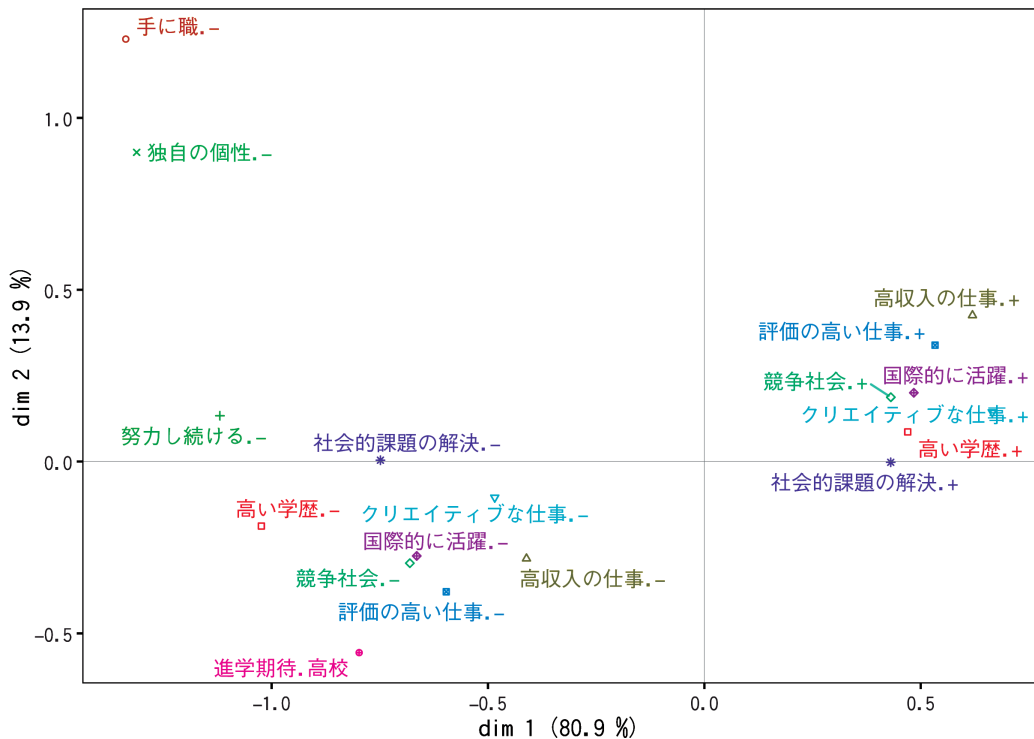


図1 子育て意識空間(1軸に対して平均以上の寄与をもつカテゴリのみを图示)

一方の2軸についても、平均以上の寄与 (>100/39=2.56, 表2中の太字) をもつカテゴリのみを図2に示す。



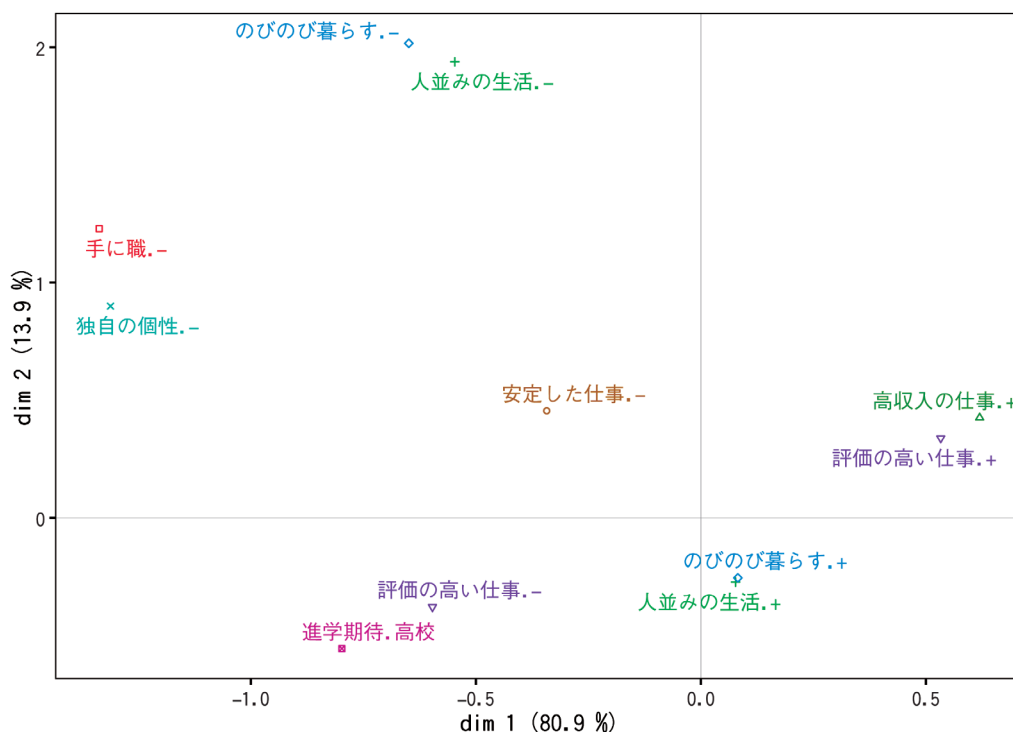


図2 子育て意識空間（2軸に対して平均以上の寄与をもつカテゴリのみを图示）

2軸では、「のびのび暮らす-」「人並みの生活-」「手に職-」「独自の個性-」「安定した仕事-」「高収入の仕事+」「評価の高い仕事+」が上方に、「進学期待 高校」,「評価の高い仕事-」,「のびのび暮らす+」「人並みの生活+」が下方に位置している。なかでも2軸に対して大きな寄与をもっているのが順に「人並みの生活-」(21.93),「のびのび暮らす-」(21.59),「手に職-」(8.42),「独自の個性-」(5.58)となっている。このことから上に行くほど、人並みの生活がおくれればよい、背伸びをせずに自然体でのびのびと暮らしてほしい、手に職をつけたり給料が低くても安定した仕事に就いたりしてほしい、独自の個性を伸ばしてほしいといった期待よりも、収入や世間的な評価を重視し、高い教育・社会的地位の達成を目指す業績主義的志向がみられると解釈できる。逆に言えば下に行くほど、背伸びをせずに安定的で身の丈に合った「平凡」な生活を求める考えを有していることが分かる。

以上をふまえると、本調査における30代の父親・母親の子どもに対する教育期待の分化は、まずその多寡（積極性の度合い）によって大部分が説明されるが、業績主義に親和的であるかどうかによっても分化していると言える<sup>9)</sup>。

#### 4.2. 補助変数との対応関係

次に、以上でみた子育て意識空間の特徴をふまえた上で、諸個人の社会的属性や保有する資本との対応関係についてみていくことにしたい。まず、子育て意識空間上に回答者のSES、すなわち本人の「学歴」「収入」「職業（雇用形態）」を補助変数として投入した結果を図3に示す。

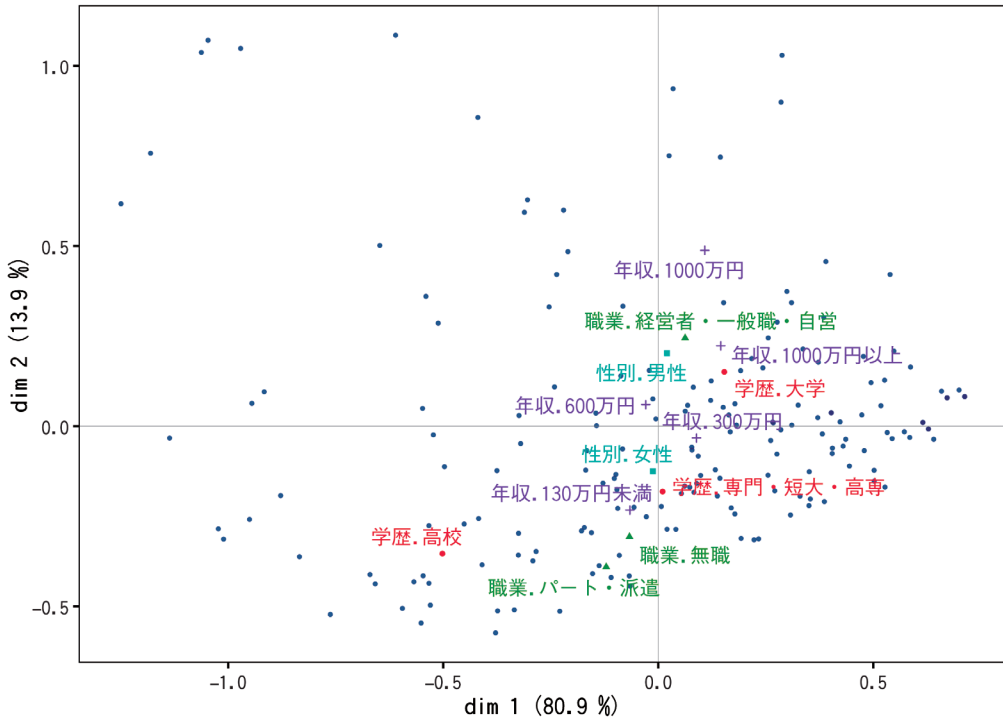


図3 子育て意識空間に配置した補助変数 (SES)

まず回答者の学歴は概ね、1軸に沿って左から右側にかけて、また2軸に沿って下から上側にかけて「高校」「専門・短大・高専」「大学」と並んでいることが分かる。このことから、高学歴層において子どもに積極的に教育期待を抱き、業績主義的志向も強くなる傾向が読み取れる。年収や職業（雇用形態）については概ね2軸に沿って分布しており、年収が高いほど、また、無職<sup>10</sup>や非正規雇用（「パート・派遣」）よりも正規雇用（「経営者・一般職・自営」）の方が上側に位置し、業績主義と親和的であることが分かる。

上述の解釈の妥当性はカテゴリー間の座標点の差によって確認することができる。座標点の差が大きい、すなわち、軸との関連がある<sup>11</sup>と考えられる項目は、本人の「学歴」「収入」「職業（正規雇用 - 非正規雇用）」であった。具体的には、「学歴」は1軸と2軸の両方において0.4以上（1軸0.655, 2軸0.504）の値を取っており、教育期待の多寡と業績主義との親和性の双方と関連していることが分かる。また、「収入」と「職業（正規雇用 - 非正規雇用）」は、2軸に沿って分布し、それぞれ0.456と0.635の値を取っており、業績主義的志向と関連していることが読み取れる。

性別に関しては1軸方向にはほとんど差がみられないが、2軸方向でみると男性が上方に位置しており、女性に比べて業績主義に親和的であることが読み取れる。ただし座標点の差分としては1軸0.033, 2軸0.327であり、1軸と2軸ともに関連は強くない。すなわち、性別によって教育期待の多寡や業績主義との親和性が大きく異なるわけではないと言える。

次に、回答者の社会関係および文化的活動に関する変数を投入し、それらを空間上に配置した結果をそれぞれ図4と図5に示す。

多重対応分析を用いた子育て意識空間の構築

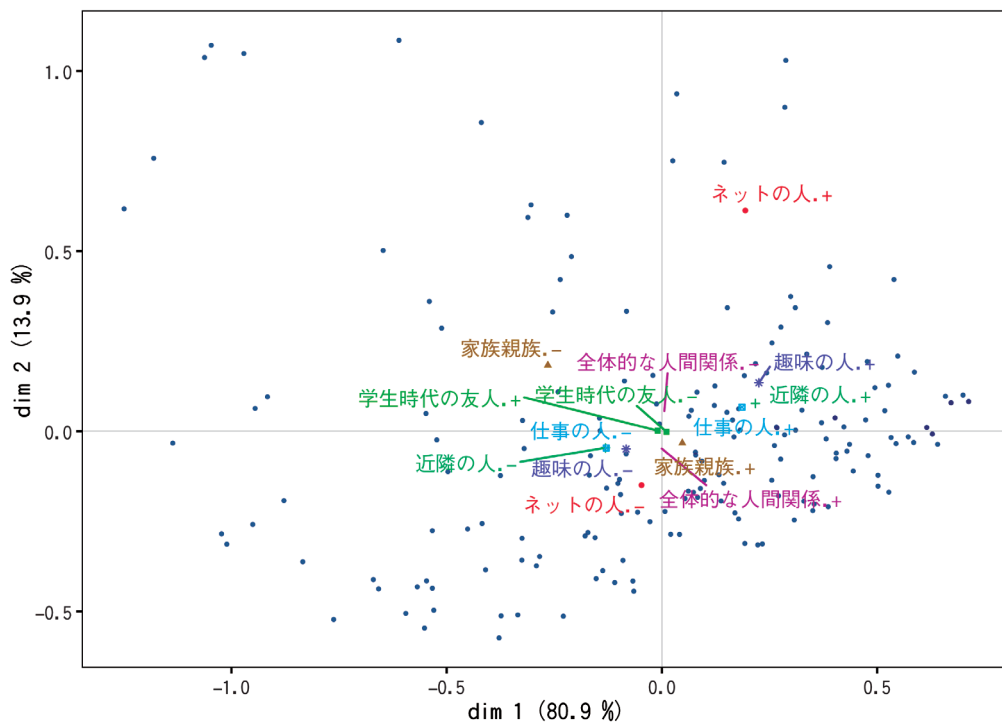


図4 子育て意識空間に配置した補助変数（社会関係）

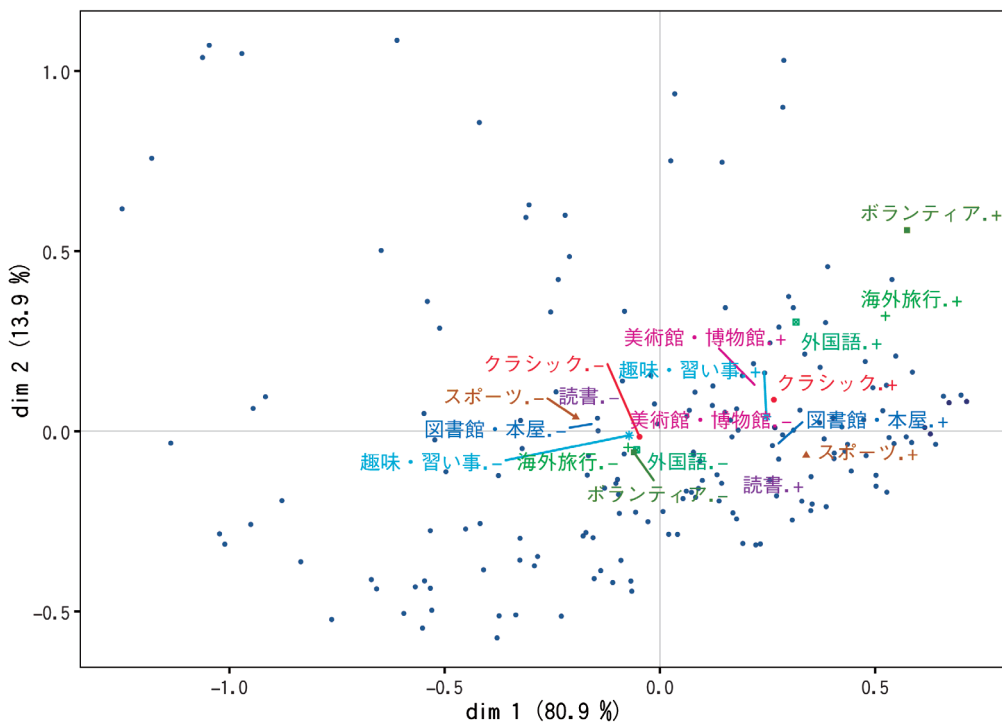


図5 子育て意識空間に配置した補助変数（文化的活動）

図4と図5の結果からはいずれも、右側にいくほど「+」の項目、左側にいくほど「-」の項目が並んでいることが分かる。このことから、社会関係が豊かで文化的活動も積極的に行っている者ほど、子どもにより積極的に教育期待をかけていると言える。

座標について確認すると、「注目すべき差」(Le Roux, Bienaise & Durand 2019) がみられたカテゴリは、社会関係については「インターネット上の知り合いとの交流」であった。具体的には、2軸においてカテゴリ間の差分が0.762となっており、インターネット上の知り合いとよく交流をしている人は業績主義に親和的な傾向があることが分かる。文化的活動に関しては、「スポーツをする」「図書館・本屋に行く」「海外旅行に行く」「ボランティア活動をする」において、軸との関連がみられた。具体的には、「ボランティア活動をする」は、1軸と2軸の両方において0.4以上(1軸0.635, 2軸0.617)の値を取り、教育期待の多寡と業績主義的志向の双方と関連していることが分かる。また、「海外旅行に行く」「スポーツをする」「図書館・本屋に行く」は、それぞれ1軸に沿って分布し、0.598, 0.535, 0.424の値を取り、教育期待の多寡と関連していることが読み取れる。

一方で、「注目すべき差」とまでは言えないものの、よく「読書をする」と回答している者は下側に位置しており、業績主義的志向とは異なるベクトルの教育期待を有している可能性が示唆されている点も興味深い。

### 4.3. 階層クラスター分析による結果

続いて、諸個人の側から子育て意識空間の特徴を確認していくために、階層クラスター分析(ウォード法)を行った。適度なクラスサイズで分類するために、ここでは3つのクラスに分類する。図6はその分類をデンドログラムに示したもので、図7はそれを子育て意識空間上に示したものである。以下、個人の結果をまとめた表4(子育て意識空間の構築に用いた変数)および表5(補助変数)をもとに、各クラスの特徴について分析していく。

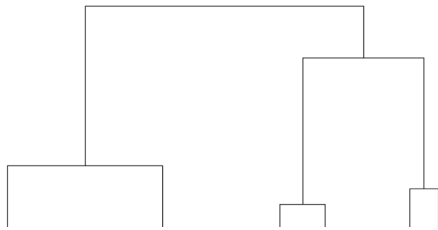


図6 階層クラスター分析の結果  
(デンドログラム)

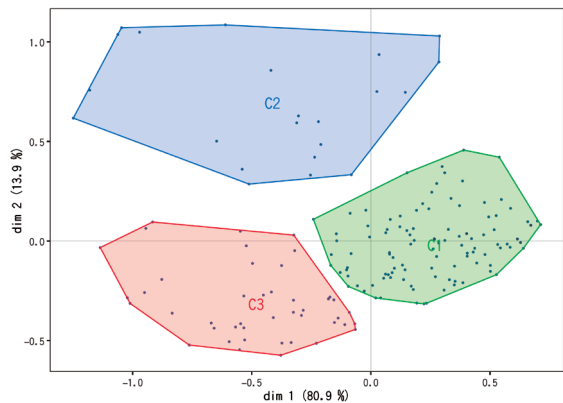


図7 階層クラスター分析の結果の空間上布置

表4 各クラスの特徴（子育て意識空間の構築に用いた変数）

		C1 (62.9%)	C2 (12.4%)	C3 (24.7%)
進学期待	高校	7.1%	9.5%	52.3%
	専門・短大・高専	12.5%	14.3%	11.4%
	大学	80.4%	76.2%	36.4%
子育て方針	A+	10.7%	13.6%	2.3%
	A-	36.6%	40.9%	11.4%
	B-	40.2%	40.9%	68.2%
	B+	12.5%	4.5%	18.2%
子どもの将来への期待	高い学歴	91.1%	45.5%	22.7%
	手に職	97.3%	45.5%	86.4%
	安定した仕事	69.6%	27.3%	65.9%
	やりたいこと	84.8%	54.5%	68.2%
	高収入の仕事	52.7%	40.9%	6.8%
	人なみの人生	95.5%	22.7%	100.0%
	努力し続ける	92.9%	54.5%	56.8%
	独自の個性	94.6%	50.0%	79.5%
	地元で就職	38.4%	40.9%	40.9%
	競争社会	74.1%	68.2%	25.0%
	クリエイティブな仕事	55.4%	36.4%	11.4%
	のびのび暮らす	96.4%	27.3%	100.0%
	人を助ける	72.3%	50.0%	68.2%
	評価の高い仕事	69.6%	54.5%	9.1%
	社会的課題の解決	79.5%	45.5%	31.8%
	国際的に活躍	77.7%	45.5%	13.6%

まず、全体の62.9%を占めるC1は、進学期待として大学以上を望む割合が80.4%を占め、また、「地元で就職してほしい」を除く全ての項目において肯定的回答の割合が3つのクラスの中で最も高い結果となった。具体的には、「できるだけ高い学歴を得てほしい」(91.1%)、「リスクを顧みずやりたいことに挑戦してほしい」(84.8%)、「現状に満足せず、常に努力し続けられる人になってほしい」(92.9%)、「国際的に活躍できる人になってほしい」(77.7%)といった上昇志向的に自らの可能性を追求してほしいとする期待とあわせて、「手に職をつけてほし

い」(97.3%)、「人並みの人生が送ればよい」(95.5%)、「背伸びをせずに、自然体でのびのびと暮らしてほしい」(96.4%)といった対照的とも言える期待を有しているほか、「自身の独自の個性を伸ばすことを大事にしてほしい」(94.6%)、「社会的課題の解決に貢献できる人になってほしい」(79.5%)といった期待も比較的大きい。こうした結果からは、C1は全方位的な教育期待を形成している層であることが分かる。子育て方針は、Bの方が若干多いものの、AとBとがおおよそ半数に分かれている(A: 47.3%, B: 52.7%)。

それに対して全体の12.4%と限定的であるC2では、C1と同様に多くが大学以上の学歴を望んでいるものの(76.2%)、C1と比べてほとんどの項目において肯定的回答の割合が減っていることから、教育期待の積極性の度合いは相対的に低いと言える。ただし、「とにかく高収入の仕事についてほしい」「競争社会を勝ち抜いてほしい」「世間的な評価の高い仕事についてほしい」の項目については減少幅が小さく、C1とそれほど大きな差がみられないことから(それぞれ順に52.7%と40.9%, 74.1%と68.2%, 69.6%と54.5%)、業績主義的志向が相対的に強いという特徴が読み取れる。このことは、「給料が低くても職を失う心配のない安定した仕事についてほしい」「人並みの生活をおくれればよい」「背伸びをせずに、自然体でのびのびと暮らしてほしい」「自分が少し損をしても困っている人を助けられる人になってほしい」に対する肯定的回答の割合が3つのクラスで最も小さい(それぞれ順に27.3%, 22.7%, 27.3%, 50.0%)ことから裏付けられるものとも言える。子育て方針は、Aの方が若干多いものの、AとBとがおおよそ半数に分かれている(A: 54.5%, B: 45.4%)。

最後に、全体の24.7%を占めるC3ではまず、進学期待として大学以上と回答している者が36.4%、「できるだけ高い学歴を得てほしい」に対する肯定的回答が22.7%にとどまることから、学歴をさほど重視していない点が特徴として挙げられる。その一方で、「手に職をつけてほしい」「人なみの生活をおくれればよい」「背伸びをせずに、自然体でのびのびと暮らしてほしい」といった項目への肯定的回答の割合は高く(それぞれ順に86.4%, 100%, 100%)、手に職志向や背伸びをせずに身の丈に合った「平凡」な生活を求める志向が相対的に強くみられる点も特徴的であると言える。このことは、「とにかく高収入の仕事についてほしい」(6.8%)、「世間的に評価の高い仕事についてほしい」(9.1%)、「競争社会を勝ち抜いてほしい」(25.0%)といった期待が他の2つのクラスと比べて低いことから示されていると言える。その他の項目としては、「自身の独自の個性を伸ばすことを大事にほしい」(79.5%)、「自分が少し損をしても困っている人を助けられる人になってほしい」(68.2%)といった期待に対する肯定的割合も比較的高い。子育て方針としては、Bが86.4%と大部分を占めており、親が計画的且つ積極的に発達を促すというよりも、子どもの自主性に任せて自然な成長を見守りたいとする志向性が強い層だと言える。

表5 各クラスの特徴（補助変数）

		C1	C2	C3
		(62.9%)	(12.4%)	(24.7%)
性別	男性	60.3%	17.6%	22.1%
	女性	64.5%	9.1%	26.4%
学歴	高校	50.0%	11.1%	38.9%
	専門・短大・高専	73.1%	3.8%	23.1%
	大学・大学院	64.7%	14.7%	20.7%
職業	経営者・一般職・自営	61.2%	18.4%	20.4%
	パート・派遣	57.7%	3.8%	38.5%
	無職	69.4%	4.1%	26.5%
年収	1000万円以上	42.9%	28.6%	28.6%
	1000万円	62.1%	20.7%	17.2%
	600万円	64.0%	16.0%	20.0%
	300万円	61.5%	7.7%	30.8%
	130万円	64.1%	6.4%	29.5%

では以上の3つのクラスに位置する諸個人はどのような人々なのだろうか。表5の結果をもとに、まず性別間で比較すると、男女ともにC1, C3, C2の順に多いという点で共通しているが、男性ではC2の割合が女性よりも多いという特徴がみられる（男性17.6%、女性9.1%）。このことから、男性の方が業績主義的な教育期待を有する傾向にあると言える。

学歴との関連については、いずれの学歴においてもC1の割合が最も大きいのが、高卒層ではC3の割合も38.9%と大きなものとなっている。職業との関連については、正規雇用層（「経営者・一般職・自営」）においてC2が、非正規雇用層（「パート・派遣」）においてC3が占める割合が、他の2つのクラスと比べて大きいことが分かる。また無職層でC1が約7割を占めるという結果は、専業主婦層において全方位的な教育期待を有する者が多いことを示している可能性がある。最後に年収との関連については、年収が高い者ほどC2、すなわち業績主義的な期待を、反対に1000万円以下では年収が下がるほどC3、すなわち背伸びをせずに身の丈に合った「平凡」な生活を求める期待を抱く傾向があることが読み取れる。

以上の3つのクラスの特徴は以下のように整理できる。まず、教育期待を積極的に形成し全方位的な教育期待を抱く傾向にあるC1と、それと比較するとその積極性の度合いが低くなるC2とC3が、概ね1軸方向に沿って対置している。そして、高い進学期待および高収入の仕事や世間的に評価の高い仕事に就き、競争社会を勝ち抜いていってほしいという業績主義的志向を相対的に強く有するC2と、学歴にはこだわらず、手に職をつけて背伸びをせずに身の丈に合った「平凡」な生活を求める志向が強く、自然放任主義的な子育て方針をとる傾向にあるC3とが、概ね2軸方向に沿って対置している。

以上の階層クラスター分析による結果は、MCA を用いて図1・2で確認した1軸と2軸からなる空間の特徴と概ね対応するものであり、また、各クラスに位置づく諸個人の社会的属性についても前節で確認した補助変数の布置と概ね整合的であると言える。

## 5. 母親・父親別にみる子育て意識空間の特徴

最後に本節では、母親と父親の子育て意識の違いをみるために、男女別に分析した結果についてみていく。

まず、図8に示した母親の子育て意識空間と、図9に示した父親の子育て意識空間における軸は、図1と図2で確認した全体での分析結果と同様に解釈できる。すなわち、1軸が教育期待の多寡（積極性の度合い）、2軸が業績主義への親和性を表していると考えられる。

男女別の分析によってみられた違いとしてはまず、若干ではあるものの説明率に変化がみられた点があげられる。母親の子育て意識空間では、全体での分析結果と比べて1軸の説明力が低下した一方で（80.9%→70.0%）、2軸の説明力は上昇した（13.9%→19.6%）。父親の子育て意識空間では、1軸の説明力が上昇した一方で（80.9%→85.0%）、2軸の説明力が低下した（13.9%→7.9%）。このことは、母親では業績主義に親和的か否かという対比が、父親では教育期待の積極性の度合いによる対比がより明確であることを示していると言える。

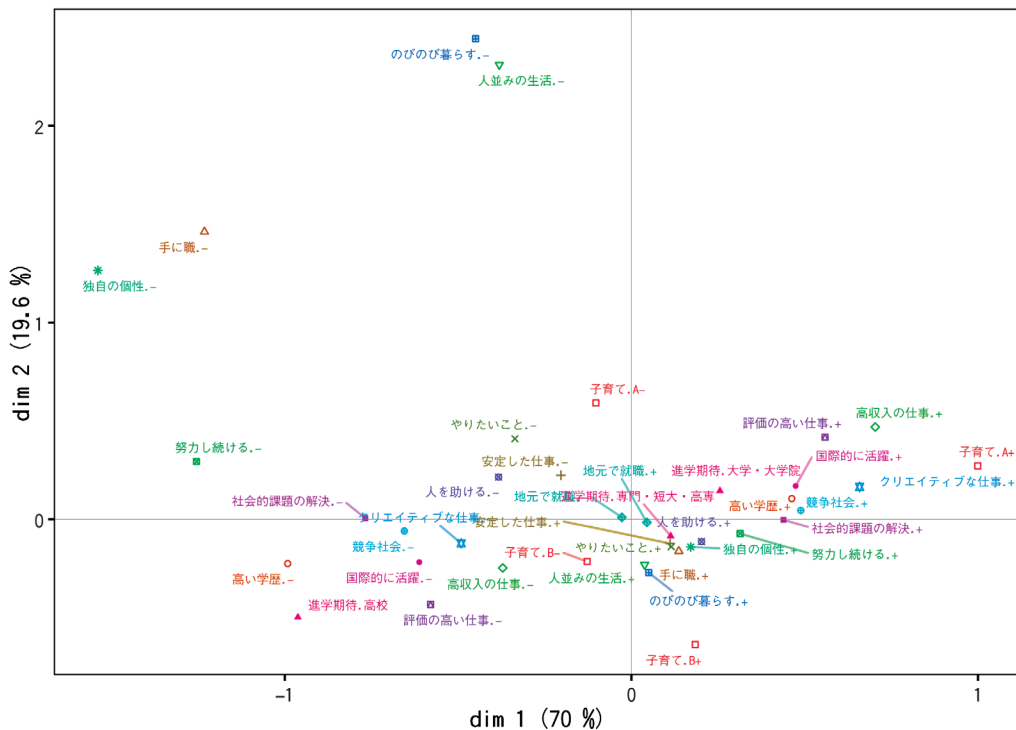


図8 母親の子育て意識空間



多重対応分析を用いた子育て意識空間の構築

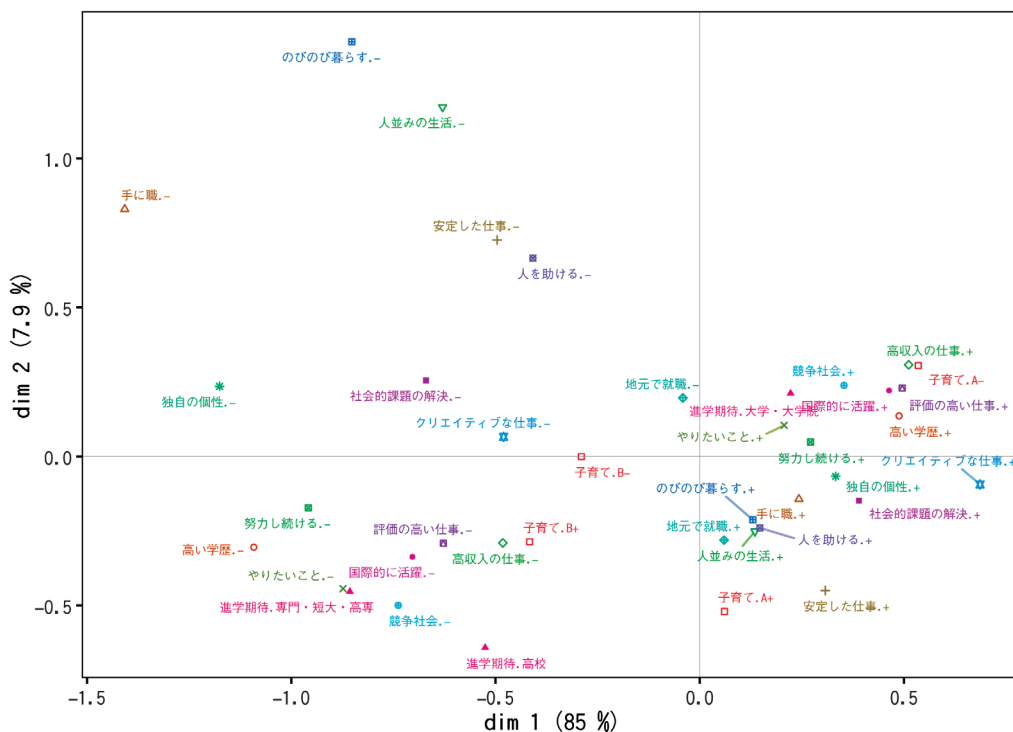


図9 父親の子育て意識空間

次に注目されるのは、子育て方針に関する変数の配置が、母親と父親の子育て意識空間で異なっている点である。具体的には、母親においては「親が積極的に子どもの発達を促し、計画的に子育てをしたい」という考えに「近い」とする「子育てA+」と、「どちらかといえば近い」とする「子育てA-」がいずれも上方に位置しているのに対して、父親では「子育てA+」が下側に、「子育てA-」が上側に位置し、上下に分かれている。

Lareau (2011) は、家庭や学校における長期にわたる参与観察やインタビュー調査をもとに、アメリカのミドルクラスとワーキングクラスの母親の子育ての特徴について詳細に分析した。そこでは、ミドルクラスの母親は子どもの全面的な発達を促すべく計画的・継続的に力を注ぐ一方で、ワーキングクラスの母親は、衣食住などの生活に関わる環境条件を整えることに主眼を置き、そうした条件さえ満たせば子どもは自然に育っていくものとして、成長を見守る姿勢を有していることが明らかにされている。そして、そうした親の価値観や方針が、子どもの放課後の過ごし方や家庭内での会話をはじめとする日常的な子育て実践を枠づけ、子どもの学校適応や対人スキル等にも影響を及ぼしていると言い、ミドルクラス的な家庭教育を受けた子どもの方が教育・地位達成においてはより有利であるとしている。

こうした先行研究の知見をふまえれば、「親が積極的に子どもの発達を促し、計画的に子育てをしたい」という考えに「近い」とする「子育てA+」が子育て意識空間の右上に、また、「親が積極的に子どもの発達を促すというよりも、子どもの自主性に任せて、自然な成長を見守る子育てをしたい」という考えに「近い」とする「子育てB+」と「どちらかといえば近い」とする「子育てB-」がその左下に位置している、母親の子育て意識空間の結果は理解がし

やすい。それに対して、父親の子育て意識空間では、「子育て A+」が子育て意識空間の下方、すなわち、「背伸びをせずに自然体でのびのびと暮らしてほしい」「手に職をつけてほしい」「給料が低くても安定した仕事に就いてほしい」「人並みの生活をおくれればよい」「地元で就職してほしい」といったカテゴリーの近くに位置づいている点は予想に反する結果であると言える。すなわち、これまで「全面発達に向けた計画的子育て (concerted cultivation)」は、高い教育・地位達成および業績主義と親和的なものとして捉えられてきたきらいがあるが、今回の結果からは、父親に関して言えば、そうした従来想定されてきた価値観とだけでなく、安定志向や背伸びをせずに身の丈に合った「平凡」な生活を求める価値観とも結びつくものである可能性が示唆されたと言える。

こうした傾向が母親ではみられず、父親のみにおいてみられた理由はどのように説明できるだろうか。一つには、職業社会との結びつきが強い男性において、今日の不安定な社会状況下では、給料が低くとも安定した仕事に就くことや、背伸びをせずに自然体でのびのびと暮らすこと、人並みの生活を送ることはいずれも、もはや子どもの自然な成長に任せるだけでは容易に達成できるものではなく、親が子どもの全面的な発達を促すべく計画的・継続的に力を注がなければ叶えられないものだとして認識している可能性があると考えられる。ただし、以上はあくまで仮説であり今後より精緻な検証が求められる。

## 6. まとめと考察

ここまで大都市に居住する 30 代の父親・母親に対するオンラインパネル調査から得たデータをもとに、狭義／広義の子どもへの教育期待に焦点を当てて多重対応分析を行い、その全体像、およびその背後にある個人の特徴との対応関係を明らかにしてきた。本稿の知見は以下の 4 点にまとめられる。

第 1 に、「子どもへの進学期待」「子育て方針」「子どもの将来に対する期待」に関する変数に基づき MCA を用いて子育て意識空間を構築した結果、教育期待の多寡（積極性の度合い）を示す 1 軸、業績主義に親和的か否かを示す 2 軸が見出され、これらが全体の 94.8% とそのほとんどを説明していることが明らかとなった。特に、子どもに求めるものが多いか少ないかという教育期待の多寡を示す 1 軸が子育て意識空間の約 8 割を説明するという結果は、これまで多くの先行研究がその規定要因に焦点化して研究を進めてきたことの重要性を改めて強調するものである。一方で、2 軸の業績主義に親和的か否かという軸も 13.9% と小さくない説明力をもっていることが明らかとなり、単に教育期待の量的な側面に着目するだけでは見逃される側面を捉えた点に、本研究の意義を見出すことができると言える。

第 2 に、子育て意識空間と社会的属性および保有する資本との対応関係を分析したところ、1 軸の教育期待の多寡には本人の学歴が関わっており、学歴が高くなるほど教育期待の積極性の度合いも強くなっていった。また 2 軸の業績主義への親和性についても学歴が高いほど、また、収入が高く雇用形態が安定的であるほど強くなる傾向がみられた。これらの結果より、SES が高い層において積極的に子どもへの教育期待を抱くとともに、業績主義的志向も強くなる傾向が示された。さらに、社会関係が豊かで文化的活動にも積極的に行っている者ほど、子どもにより積極的に教育期待をかけていることも明らかになった。特に、「海外旅行に行く」「スポーツをする」「図書館・本屋に行く」人は子どもに積極的に教育期待をかけていることや、インターネット上の知り合いとよく交流をしている人は業績主義に親和的な教育期待を有している

こと、ボランティア活動をする人は子どもに積極的に教育期待をかけるとともに業績主義と親和的な期待を抱く傾向がみられることも示された。

第3に、諸個人の側から子育て意識空間の特徴を確認していくために、階層クラスター分析を通じて3つのクラスに分類を行ったところ、それぞれのクラスの特徴は、MCAの結果と概ね対応する結果となった。具体的にはまず、教育期待を積極的に形成し全方向的な教育期待を抱く傾向にあるC1と、それと比較するとその積極性の度合いが低くなるC2とC3が、概ね1軸方向に沿って対置していた。その上で、高収入の仕事や世間的に評価の高い仕事に就き競争社会を勝ち抜いてほしいといった業績主義に親和的な期待を相対的に強く有するC2と、自然放任主義的な子育て方針をもとに、学歴にはこだわらず「平凡」に暮らしていくことを期待するC3とが概ね2軸方向に沿って対置していた。また、各クラスに位置する諸個人の社会的属性もMCAで投入した補助変数の布置と概ね整合的であった。

第4に、男女別に分析をした結果、軸の説明力と「子育て方針」の項目の配置において違いがみられた。軸の説明力については、母親の子育て意識空間で2軸の説明力が上昇し、父親の子育て意識空間で1軸の説明力が上昇したことから、母親では業績主義に親和的か否かという対比が、父親では教育期待の積極性の度合いによる対比がより明確であることが示された。「子育て方針」の項目の配置については、母親の子育て意識空間においては、「親が積極的に子どもの発達を促し、計画的に子育てをしたい」という考えに「近い」とする「子育てA+」と「どちらかといえば近い」とする「子育てA-」がいずれも上方に位置しているのに対して、父親では「子育てA+」が下側に、「子育てA-」が上側に位置しているという違いがみられた。「子育てA+」と「子育てA-」が上下で分かれるという父親の子育て意識空間の結果からは、これまで高い教育・地位達成への期待や業績主義に親和的であると捉えられがちであった「全面発達に向けた計画的子育て (concerted cultivation)」が、必ずしもそうした従来想定されてきた価値観とだけでなく、安定志向や背伸びをせず身丈に合った「平凡」な生活を求める価値観とも結びつくものである可能性が示唆された。あくまで仮説的な説明にとどまるもののその背景には、職業社会との結びつきに強い男性において、今日の不安定化する社会状況下ではのびのびと自然体で暮らしたり、人並みの生活を送ったりすることを実現するハードルが高くなっており、それらは親が計画的・継続的に子どもの全面発達に向けて力を注がなければ叶えられないものと認識されるようになってきている側面があると考えられる。

以上の本稿から見出された知見は、子どもに対する教育期待が高いか低いかという一元的な量的尺度をもとに、その規定要因を精緻に明らかにすることに主眼を置いてきた先行研究に対して、いかなる教育期待を有しているかといった教育期待の多元性、および複数の変数の相互関係を捉えながら教育期待を構成する論理に迫っていく必要性を示したという点で重要な意義をもつ。特に、先行研究では暗黙裡に「高い教育期待」＝「業績主義に親和的な高い進学期待」と読み替えられて論じられがちであったと言えるが、本稿の結果においては「教育期待の多寡 (積極性の度合い)」と「業績主義的志向」はそれぞれ1軸、2軸に分かれ、両者は完全に一致するわけではないことが明らかとなった。すなわち、子どもに対して積極的に教育期待を抱いているものの、その中身として非業績主義的な将来像を望んでいる層も一定数いるということが示されたと言える。また本稿では、こうした進学期待に矮小化されない、より広義的教育期待の多様性を捉える上で、MCAの適用、および階層クラスター分析の併用が有用であることも示された。

今後の課題としては、本稿で得られた知見をもとに、子育て意識空間のより精緻な把握に向

けて質問項目を再検討する必要性が指摘できる。特に今回の分析結果は、1軸（教育期待の多寡）の説明力が大きくなったが、たとえば2軸（業績主義的志向）、さらには説明力が小さく本稿では取り上げなかった3軸（地元志向）を意識した質問項目をより多く用意できれば、説明力が変化し、教育期待の多元性についてより踏み込んだ分析が可能となると考えられる。同時に、今回対象とした三大都市圏以外に居住する父親・母親にも対象を広げることで、異なる軸が析出される可能性もある。また、インタビュー調査等の質的調査の併用、さらには、意識ではなく実際の子育て実践に関するデータや、夫婦ペアデータの収集へと展開させていくことで、教育期待の内実により詳細に迫っていくことも今後の課題としたい。

### 〈注〉

- 1) ここでいうオンラインパネル調査とは、「調査会社の保有するオンラインパネルに対して、ウェブ法によって回答を得る調査」（轟ほか編 2021）のことを指す。
- 2) 荒牧自身は、従来型の「地位達成志向」に対して、「異質な他者が相互の自由な活動を尊重しつつ協力し助け合うことや、そうした社会のあり方に価値をおく志向性」（p.146）を「共生志向」と名付け、子育て志向を4類型（いずれも低い「消極型」、地位達成志向のみ高い「達成重視型」、共生志向のみ高い「共生重視型」、どちらも高い「達成・共生型」）に分類した上で、ネットワークや社会的属性との関連を分析している。
- 3) 知念（2022a）は、回帰分析と多重対応分析を「線」と「網」という対比で捉えた Bourdieu（1979=1990 [2020]: 182）を引用しつつ、回帰分析による「線的思考」では、諸変数間の関係性を十分に捉えることができないこと、一方で多重対応分析では、「変数が相互依存にあることを前提として関係性を幾何学的に表現（＝「関係の網」の再構築）することができる」という強みがあることを指摘している（p.554）。
- 4) プルデュューによる社会空間アプローチでは、MCAによる量的分析にとどまらず、その結果をふまえたうえで、インタビューなどの質的分析を併用することで、人々の生活空間と社会空間の対応をより立体的に明らかにすることも試みられている（Bennett et al. 2009; Fries 2009）。日本でこのような研究の取り組みはまだ少ないが、知念ほか（2022; 2023）等がある。本稿では、MCAによる量的分析が中心となるが、今後の展望として、インタビュー調査等の質的分析を併用した調査への展開も企図している。
- 5) GMOリサーチの公式Webサイトに掲載された2023年8月現在のモニター数。
- 6) オンラインパネルを取りまく現状においては、こうした偏りを補正的確に評価するための情報も入手が難しいと言われている（轟ほか編 2021）。
- 7) 表3中の「社会関係」と「文化的活動」の度数は「+」の回答を示したものである。
- 8) MCAでは理論上、全カテゴリーの数から全変数の数を引いた数の軸が抽出されるため、各軸の説明率が低く算出される。このことによって主軸の重要性が過小評価されてしまうことを防ぐために、ベンゼクリによって修正分散率が提案されている（Benzecri 1992: 412; Le Roux & Rouanet 2010=2021: 56）。
- 9) 3軸は、地元で就職してほしいか否かで分化しており、「地元志向」と呼べる軸が見出されたが、分散が3.2%と小さいため、その詳細は割愛する。
- 10) 本稿における「無職」の解釈については留意が必要である。分析対象である178名のうち、「無職」と回答した49名は全て女性であり、さらに、そのうち四年制大学を卒業した者が24名（49.0%）を占めることから、このカテゴリーには「専業主婦」が多く含まれていると考えられる。
- 11) 目安として、カテゴリー間の座標点の差が0.5よりも大きい場合、その差は「注目すべき差」とみなすことができるとされている（Le Roux & Rouanet 2010=2021: 78）。この座標点の差については、0.4以上を基準として提唱するものもあり（Le Roux, Bienaise & Durand 2019: 22）、本稿では後者に依拠して軸との関連を読み取っている。

### 〈参考文献〉

- 荒牧草平, 2016, 『学歴の階層差はなぜ生まれるのか』勁草書房。  
 ———, 2023, 『子育て世代のパーソナルネットワーク——孤立・競争・共生』勁草書房。  
 Bennett, T., Savage, M., Silva, E.B., Warde, A., Gayo-Cal, M., and Wright, D., 2009, *Culture, Class, Distinction*,

- Routledge. (=2017, 磯直樹・香川めい・森田次朗・知念渉・相澤真一訳, 『文化・階級・卓越化』青弓社.)
- Benzécri, J.P., 1992, *Correspondence Analysis Handbook*, Marcel Dekker.
- Bourdieu, P., 1979, *La Distinction: Critique sociale du jugement*, Minuit. (=1990 [2020], 石井洋二郎訳『ディスタクシオン I・II——社会的判断力批判』藤原書店.)
- 知念渉, 2022a, 「大学を選択する論理とジェンダー」『教育学研究』89(4): 552-64.
- 知念渉, 2022b, 「学校文化と教育格差——日本社会に文化資本概念をどう適用するか」川口俊明編『教育格差の診断書——データからわかる実態と処方箋』岩波書店: 139-68.
- ・西田芳正・栗原和樹・田中祐児・数実浩佑・西徳宏・山口真美・瀬戸麗・秋山みき・志水宏吉, 2022, 「都市で育つ／育てる——親子への量的・質的調査に基づく社会空間の素描」『日本教育社会学会第74回大会発表要旨集録』: 138-41.
- ・瀬戸麗・栗原和樹・山口真美・西田芳正・数実浩佑・西徳宏・田中祐児・秋山みき, 2023, 「都市で育つ／育てる(2)——教育をめぐる親子の苦悩」『日本教育社会学会第74回大会発表要旨集録』: 109-12.
- Brown, P., 1995, "Cultural Capital and Social Exclusion: Some Observations on Recent Trends in Education, Employment and the Labour Market," *Work, Employment and Society*, 9(1): 29-51. (= 2005, 稲永由紀訳, 「文化資本と社会的排除——教育・雇用・労働市場における最近の傾向に関するいくつかの考察」A.H. ハルゼー・H. ローダー・P. ブラウン・A.S. ウェルズ編, 住田正樹・秋永雄一・吉本圭一編訳『教育社会学——第三のソリューション』九州大学出版会: 597-622.)
- Fries, C. J., 2009, "Bourdieu's Reflexive Sociology as a Theoretical Basis for Mixed Methods Research," *Journal of Mixed Methods Research*, 3(4): 326-48.
- 本多則恵, 2005, 「社会調査へのインターネット調査の導入をめぐる論点——比較実験調査の結果から」『労働統計調査月報』57(2): 12-20.
- 藤原翔, 2009, 「現代高校生と母親の教育期待——相互依存モデルを用いた親子同時分析」『理論と方法』24(2): 283-99.
- Heckman, James J., 2013, *Giving Kids a Fair Chance*, MIT Press. (= 2015, 古草秀子訳, 『幼児教育の経済学』東洋経済新報社.)
- 片岡栄美, 2019, 『趣味の社会学——文化・階層・ジェンダー』青弓社.
- 川口俊明, 2020, 「多重対応分析による子育て空間の分析——学校教育に関わる活動に着目して」『家族社会学研究』32(2): 156-68.
- 金南咲季, 2019, 「教育期待——親は子どもにどのような期待をしているのか」伊佐夏実編, 2019, 『学力を支える家族と子育て戦略——就学前後における大都市圏での追跡調査』明石書店: 219-41.
- 近藤博之, 2019, 「教育費の公私負担意識——社会空間アプローチによる世論の分析」『教育社会学研究』104: 171-91.
- Lareau, Annette, 2011, *Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life, With an Update a Decade Later*, University of California Press.
- Le Roux, B., & H. Rouanet, 2010, *Multiple Correspondence Analysis*, SAGE. (= 2021, 大隈昇・小野裕亮・嶋真紀子訳, 『多重対応分析』オーム社.)
- , Bienaise, S., & Durand, J.L., 2019, *Combinatorial Inference in Geometric Data Analysis*, CRC Press, Taylor & Francis Group.
- 中澤渉, 2009, 「母親による進学期待の決定要因——マルチレベル分析による検討」Benesse 教育研究開発センター編『学校教育に対する保護者の意識調査 2008 報告書』: 82-93.
- Sewell, William H., Archibald O. Haller, and Alejandro Portes, 1969, "The Educational and Early Occupational Attainment Process," *American Sociological Review*, 34(1): 82-92.
- 志水宏吉, 2022, 『ペアレントクラシー——「親格差時代」の衝撃』朝日新聞出版.
- 須永大智, 2021, 「親の教育アスピレーションと教育期待における階層差」『家族社会学研究』33(2): 117-29.
- 高松里江, 2022, 「進路選択におけるジェンダー・トラック——男女間・同性内の進路希望の違いに着目して」『理論と方法』37(2): 170-83.
- 轟亮・杉野勇・平沢和司編, 2021, 『入門・社会調査法 第4版』法律文化社.
- 鳶島修治, 2020a, 「母親の教育期待——学校平均学力と学校の社会経済的特性に着目して」『社会学研究』104: 201-25.
- , 2020b, 「中高生の教育期待形成における父母の期待の相対的重要性」『教育社会学研究』107: 111-32.

